

CIAMはなぜ崩壊したのか

- 近代建築の裏側から探る -

笠原 利和 (感性デザイン工学科)

宮崎 充保 (感性デザイン工学科)

Why Did CIAM Break Down?

Going to The Backside of Modern Architecture

Toshikazu KASAHARA (KANSEI Design and Engineering)

Mitsuyasu MIYAZAKI (KANSEI Design and Engineering)

CIAM(Congres Internationaux d'Architecture Moderne) propagated their modern way of architecture which ought to have possessed the spirit of Renaissance. The spirit has its origin in the ancient Roman tradition, the driving force at the core of the modern European society. In modern architecture the kind of change which CIAM aimed at with the Roman spirit was brought about by the social movements that took place amid the upheaval of the early 20th century Europe. The change, however, went against the spirit in the way CIAM defined it. Certain factors wedged into the ideal that CIAM had set and brought it under the influence of the other spirit that formed the modern Europe, the spirit diametrically opposite to the Roman spirit, the Germanic spirit. It was fostered by the Religious Reformation in the 15th century. That the Roman spirit was in consequence displaced by the Germanic spirit was the part and parcel of the cause for which CIAM broke down.

Key Words: *ancient Roman tradition, Germanic spirit, Catholicism, Religious Reformation, Renaissance, CIAM*

1. 近代建築の発祥地- ヨーロッパ-

CIAMとは、近代建築の中に国際様式の可能性を追求して、またその様式を世界に普及させた建築団体であり、1928年に発足して1956年に解散した。CIAMについて考える時、その活動の本質が埋め込まれている近代建築について

探ることは必要十分条件となる。したがって、ここでは近代建築の土壌となったヨーロッパ自体に焦点を置いて考えてゆくことにする。

ではヨーロッパとはいかなるものか。この簡潔で明瞭な問いに、人類は長い間、誤った答えを導き出してきた。現代において、その問いに対する答えとして、増田四郎氏は「古代ローマの伝統、ゲルマンの精神、カトリックの精神のこれら3つ

が歴史の流れのどこを切っても絡み合っているもの」¹⁾と述べている。これは、20世紀のヨーロッパの衰退と復興、そして統合化という流れから考察すると合致する解答である。

だが、20世紀初頭、厳密に言うと第1次世界大戦後は全く挙げられなかった。そこで、近代建

築の発祥の地、ヨーロッパについて考えるにあたり、以下の問いを出して解き進めながら追求していくことにする。

第1に、なぜ第1次世界大戦の終局まで冒頭の引用で示される答えに気づけなかったのか。第2に、それまでの答えとはいかなるものか。第3に、なぜ第1次世界大戦後にこのような答えを導き出せたのか。これらの3つを問題として提起する。

まず、第1の問いについて考える。この問いに

答えることは、そこに様々な要素が政治的にも、社会的にも、また文化的にも内在していることから容易なことではない。したがって、それらが織りなす歴史を軸にして考えることが最も妥当である。そこで、20世紀初頭以前のヨーロッパから、この問いへのアプローチをする。

「ヨーロッパの誕生は、現代においてはフランク王国の時代とされている。」²⁾そして、この誕生の時からルネサンス前夜までを中世と呼んでいる。この時代は、すべてが神を中心に成立しており、すなわちカトリックの隆盛期であった。そもそも、古代ローマ帝国が崩壊したのは、古代ローマの伝統に限界が生じたことが最大の原因である。「つまり、奴隷制を前提として成立していた都市市民国家に翳りが生じたのだ。奴隷制による生産の非能率性で生産技術の改善が進まず、また、ゲルマン人に帝国が圧迫されたことで奴隷源が枯渇して、もともと都市市民の人口密度は稀薄だったのに、荘園制度の成立と相成って市民が農村に流出してしまったのだ。」³⁾このような状態の中で、ゲルマン民族の新しい精神が流入したから帝国崩壊は自明なのである。古代ローマの伝統である政治的人間を理想としたポリスの世界は、成立当初から衰退する運命を背負っていたとも言える。

そして、ヨーロッパ誕生期のゲルマン諸国においては、「ゲルマンの精神」⁴⁾が基盤となった封建社会が生まれてきた。この時期の王権は古代ローマ帝国のそれと比べると遥かに弱く、この傾向は中世の終焉まで続く。その理由は、封建社会自体にある。この社会の原動力は、「修道院で行う協同作業」⁵⁾にあり、ここで生まれた精神が、ゲルマンの精神を更に明確にさせた。魂の平安を求め、霊的になるとうとする人間を理想とした世界を現実にするには、十分な作業であったと言える。その結果、修道院を支配していたカトリック教会が強大となり、国家はいつまでも教会の地位を上回ることはできなかったのである。中世という時代を最も鮮明に表現したのが、中世都市自体にある。「中世ヨーロッパは全体として農村社会であるが、12世紀頃には都市が成立していて、中世社会の重要な要素となっていた。」⁶⁾そして、中世都市は古代や近代の都市と比べて、異質なものであったと言えよう。古代都市が政治都市であるのに対して、「中世都市は商工業を営む経済都市」⁷⁾であった。また、近代都市は国家権力の支配下に入っているのに対して、中世都市は

商人の力で自治権を獲得して都市自治体を形成した。この独立した共同体は、修道院で養った精神の所産であり、中世都市が修道院を中心に発達した農村集落にその起源をおくことを物語っている。中世を振り返ってみると、神聖ローマ帝国やフランク王国が古代ローマの伝統である皇帝理念を継承していたとはいえ、中世全体からみるとゲルマンの精神とカトリックの精神が、その時期の社会においてとりわけ重要であったと言ってよい。神聖ローマ帝国の王権の弱さがこれを証明している。

では、ルネサンス期はどうか。「この時期、イタリアを中心として各都市は東方貿易を行って、莫大な富を獲得している。」⁸⁾「商人は危険を承知で、冒険と言うべき航海を断行してまで富を得ようと東方へ繰り出していた。」⁹⁾成功すれば、得た富で都市において支配階級にもなれたからである。この富は中世のものとは比較にならないもので、したがって、この大市民の登場が都市における共同体の精神を崩壊させた。つまり、中世において都市自治体内で小市民によって行われていた共和政治が、大市民の登場で淘汰されたのである。そして、小市民と大市民との間で階級抗争が始まり、時が経つごとに激化していった。その結果、他都市との抗争も激化したことから専制政治による秩序と平和への要求が生まれたのである。このように混沌とした世界の中でルネサンスは生まれた。

したがって、ルネサンスは大市民の台頭と、それによる教会支配からの離脱が前提となって派生した運動と言えよう。つまり、ルネサンスを生んだ、人間の生身の姿に立ち帰ろうとするヒューマニズムの中には、文芸復興と同等に社会変革の意思が含まれているのである。ルネサンスの大市民が、市民が中心となって政治、文化を発達させたギリシアや古代ローマに深い憧憬を抱き、そして模範としたことは当然の成り行きであった。そのために、ラテン教義やラテン教養が様々な方面で再現されたのである。

「大市民による専制政治」¹⁰⁾は封建貴族の没落を起こさせて、そればかりか経済の中で合理主義を萌芽させて、それに不合理というべき教会を社会の中心から除外させていった。ルネサンスは、ヨーロッパの精神基盤をゲルマンの精神やカトリックの精神から、古代ローマの伝統に移行させたのである。最後に近代について。ルネサンスで封建貴族とカトリック教会が没落して、逆に市民

が権力を握ったことで、「ヨーロッパ各国に絶対王政が敷かれた。」

¹¹⁾王と市民との間に利害の一致という、いかにも合理主義的な関係が成立したからである。絶対王政を総称すると「国王による、貴族と富者のための、人民の統治」¹²⁾と言えるほど王権は強大であった。このような政治に重商主義政策が誕生したのは合理主義の所産であり、この政策を成功させるには植民地の存在が重要なのである。合理主義が帝国主義を生んだと言ってよい。

ただ、ここで注意しなければならないことがある。古代ローマにおける市民と近代の市民とはその性質が全く異なることである。近代の市民とは中産市民を指し、彼らは勤勉と勤労の中で生まれた階級であるからで、それまでの小市民や大市民とも異なる階級でもある。つまり、近代になって初めて出現した階級なのである。

このように、近代では古代ローマの伝統がヨーロッパの精神基盤において最も重要な基軸であって、ゲルマンの精神やカトリックの精神はルネサンスの精神の根底にある「中世に対する憎悪と強烈な自己否定」によって幽閉されて以来、常に潜在はしていても顕在までには至らなかった。

これらを踏まえて本題の〈なぜ、第1次世界大戦の終局まで誤った答えに気づけなかったのか〉という問題にアプローチをする。近代は、古代ローマの伝統に重点が置かれていたことは先程まで論じてきた。これは、社会体制を始めとして文化の面にまでローマ帝国に熟成されたラテン教義とラテン教養がヨーロッパに充満していたことを意味している。つまり、皇帝理念に最も誇りを持ち、またそのような国家を形成していたのがラテン民族なのである。これは、民族の生活習慣や思想といった所からではなく、もっと根深い、その民族が歩んだ歴史自体からきた性質なのである。

また、ヨーロッパ近代は帝国主義の時代であって、ヨーロッパは世界化の一途を歩んできた。このような中で、ヨーロッパ自体に深く考える動きは弱く、もっぱら彼らの関心は植民地への侵略とその統治に注がれた。この傾向はローマ帝国と同様であり、近代ヨーロッパの終焉はローマ帝国と同じく、内部崩壊に始まった。そもそも、ルネサンスにおける彼らの過去に対する自己否定の態度に誤った答えを導いた要因があった。「古代ローマの伝統である皇帝理念による帝国主義によって、全世界がヨーロッパに組み入れられて世界

の一体化が実現したが、一方ではヨーロッパ内部においては個々の国家の枠組みは強化されていた。」¹³⁾皇帝理念とは、もともとヨーロッパ世界の統合に向けられるものが、実際にはヨーロッパ世界の分裂を招いた。すなわち、ヨーロッパ列強において事象的には相互に結ばれて普遍的な単一の世界が形成されても、逆に国家主義は先鋭化されていったのである。これは大きな矛盾であり、この世界に普遍的な理念や崇高な理想は全く欠如していた表れである。つまり、資本主義における利潤の追求が先走り、本来あるべき皇帝理念は結果的には軽視されていたのである。

片やゲルマンの精神やカトリックの精神がルネサンスの自己否定によって幽閉され、片や古代ローマの伝統でさえ難壇の上にただ飾られている状態の中で、ヨーロッパの本質を考えることは不可能である。よって、近代において古代ローマとは異質の、理念や理想のない帝国主義が蔓延した。

したがって、ヨーロッパ近代において〈ヨーロッパとはいかなるものか〉という問題に誤った答えを導いたのは、このような背景からきたもので、その例が帝国主義であった。

では、第2の問題、〈誤った答えとはいかなるものか〉について述べる。第1の問いに繋がる問題で、その要素の大半は第1の問題のアプローチで論じた。

ここで注目すべきは、近代におけるラテン民族の立場とその心情である。ラテン民族は古代ローマの伝統の継承者と自負しており、古代ローマの皇帝理念に強い憧憬を抱いていた。この憧憬がただその理念の輪郭だけで本質に向けられていなかったにせよ、ヨーロッパの絶対王政の確立と、帝国主義による資本主義の発展に現実に寄与した。彼らはこの功績で、ゲルマン民族に対する優越性を確信した。

この自信から、彼らラテン民族はヨーロッパ誕生を古代ギリシアと定義した。そう定義しなければ、その文明を継承した古代ローマをヨーロッパに組み込むことができないからだ。この見解が、ローマ帝国に流入したゲルマン民族をヨーロッパ世界への移民者ばかりか、侵入者とみなすことになった。

次に第3の問題、〈なぜ、第1次世界大戦後に正しい答えを導き出し得たのか〉について。この発端は、ヨーロッパの内部崩壊が表面化して、列強の帝国主義を維持できなくなったことにある。

つまりは、第1次世界大戦によって列強が築いてきたヨーロッパの単一世界の拡大化が、列強諸国の国家主義を最大限に高揚させてしまい、植民地獲得において熱い戦争を行わざるをえなかったからである。近代におけるヨーロッパ世界の矛盾していた構造が、膨張しすぎて破裂したと言ってよい。

この戦争の結末は悲惨なもので、どのヨーロッパ列強にも勝者を導くことはなかった。ヨーロッパは焦土と化して、列強諸国は衰退した。帝国主義による繁栄は過去の遺産になってしまった。経済は底なしの不況となり、政治は不安定な状態がベルサイユ体制下で延々と続いた。今まで、形式上であったにせよ延命していた古代ローマの伝統が頓死したのである。ベルサイユ体制下のヨーロッパにおいて、本来あるべきヨーロッパ形成における3つの基軸である古代ローマの伝統、ゲルマンの精神、そしてカトリックの精神はこの大戦で一度消滅したことになる。ヨーロッパ全体が混沌とした世界となった。だが、ルネサンスの時代を振り返ってもらいたい。この時代も都市内外の抗争によって混沌とした状態であった。したがって、大戦後に新しい精神が生まれるのは必定であったのである。その顕著な例が、ナチスドイツである。ナチスは、ゲルマンの精神を復活させて、ゲルマン民族の優越性を誇示した。彼らの侵略は、そこから派生したもので、ゲルマンの精神によるヨーロッパの統一という考えからきた。また「ベルサイユ体制自体が現状維持という消極的保守的体制」¹⁴⁾であったから、そこに確固とした理念を生み出すことができずに、ファシズムの台頭を許したともいえる。そして、第2次世界大戦によって、東欧はソ連共産主義化の傘下に入り、そしてアメリカ自由主義は西欧を救済する形で浸透していった。経済だけでなく、軍事的にも政治的にもヨーロッパは超大国アメリカとソ連にその前衛として操られたのである。この情勢はヨーロッパにとって、根本的な理念と理想を早急に必要とさせた。そうせねば、嘗々と生きてきたヨーロッパにとって、その精神性においてまで死守することができなくなってきたからだ。

すなわち、第1次世界大戦によって、もともと形式であったこともあり、もろくも古代ローマの伝統は崩れ去ってしまい、ベルサイユ体制の現状維持の姿勢で全く混沌とした基軸を失ったヨーロッパと化した。この体制下においては、<ヨーロッパとはいかなるものか>という問いに対し

て、古代ローマの伝統に焦点を置いた考え方に疑問視はされても、それを修正するまでには至らなかったのである。この体制とはその表れでもある。だが、この体制において、ゲルマンの精神を旗印にヨーロッパを侵略したドイツの存在もあったことから、第2次世界大戦後、ヨーロッパの死守にあたりゲルマンの精神を認めて、カトリックの精神によってヨーロッパを一つにまとめようとする動きが勃興してきた。そして、ヨーロッパを単一の世界にまとめる考え方こそ、古代ローマの伝統に基づくものである。このような過程があったがゆえに、当初の問いに対して正しい答えを導きだせたとし、そうしたことでヨーロッパの始まりがフランク王国の成立期となったのである。

2. 近代建築の誕生期- ヨーロッパ近代-

ヨーロッパ近代を考察するにあたり、ルネサンス期に生じた2つの運動に着目する。1つはルネサンスであり、もう1つは宗教改革である。これらの運動は近代精神を形成する二大柱で、同時期に生じた運動でありながら、その性質が全く異なっていた。共に古代ローマの伝統を起因としているはずであるのに、では、なぜ性質が異なることになったのであろう。

まず、ルネサンスと宗教改革を対比させて考えてゆく。両者は個人意識の覚醒に基づいて、カトリックに対する否定と攻撃を目指す点において共通の立場に立つ。だが、個人意識の点において根本的な相違があった。ルネサンスにおいて、個人意識は自我の絶対的肯定の上に立っており、自我はそのまま絶対の権威として主張された。それと相反して、宗教改革においては、個人意識は自我の徹底的否定の上に立っていた。それゆえに、ルネサンスは市民階級の勃興を背景に生じた文化運動であり、また、文化運動に止まったからこそ社会運動とは直接の関連を持たなかったのである。この止まった要因は、芸術家が起こした個人的な運動で、彼らがこの運動に宗教信仰の持ち込みを希薄にして、ただひたすらに形態美の追求に邁進していたことにある。それに対して宗教改革は、世俗的で政治色の強いカトリック教会の教義と組織を否定して、聖書の原典に立ち帰ろうとした。政治の中枢に君臨していたカトリック教会を否定したことは、既存の社会との対立を意味しており、明確な社会変革に直結することを示唆している。それと同時に、世俗的であったルネサンスもまた否定の対象に含まれたのである。

ここで注意すべきことは、宗教改革を行うにあたって、プロテスタント各派が確固たる組織をつくって集団化したことである。カトリック教会を攻撃して、キリスト教内に新たな世界と新たな精神を構築するためには、武装化して抗争をしなければならないからだ。「信仰において、カトリックでは神(聖書)と人間との仲介として教会が置かれたが、プロテスタントではこの仲介役である教会を排除して、神と人間とを直接的関係で結ぼうとした。」¹⁵⁾したがって、聖書の原典に綴られていることは絶対であり、カトリックのような聖書の世俗化は起こりようがない。そして、人間においては信仰の中に個人という存在が認められた。だが、この関係は教条的であることから、神が信者に狂信を招くほどの絶対者となり、人間の意思はその中に含まれないことも意味している。

このような精神構造で結成された集団というもの、他のいかなる精神をも排斥する傾向がある。現実にはプロテスタントもそうであった。その結末は悲惨なもので、血の闘争となったのである。

近代精神は個人を尊重した2つの運動を根幹にして形成されたものだが、自我の肯定を絶対とした精神と自我の否定を徹底した精神という2つの互いに矛盾した側面を内在しているのである。

次に、2つの運動が派生した各々の地域に着目すると、そこに居住している民族の性質が浮き彫りとなる。ルネサンスはイタリアを中心としたラテン民族の居住する地域で起きた。彼らは世俗化した宗教や芸術を容認したし、この考えは古代ローマの伝統でもある政治的人間を理想とした精神に基づくものである。ラテン教義やラテン教養とは、この精神を具象化したものと言える。よって、自我の肯定を絶対とした精神とは、古代ローマの伝統を古典の復活という形で継承したのである。ラテン民族とは、人間性に対して無邪気で楽観的であった。

宗教改革が起こったのは、ドイツを中心とした北ヨーロッパの地域で、ここにはゲルマン民族が居住していた。この民族は宗教の世俗化を容認しなかった。ここには魂の平安を求め、霊的人間を理想としたゲルマンの精神が根強く残っていた。事実、ドイツの神聖ローマ帝国は絶対王政を敷かず、封建社会を帝国解体まで排斥できなかった。このような地域だからこそ、プロテスタントの精神構造が育まれたのである。さらに、自我の徹底

した否定の精神は、ゲルマンの精神を聖書の原典に立ち帰るといって継承したのである。ゲルマン民族は、人間性に対して厳格で、極めて内省的であった。

ヨーロッパ近代とは、帝国主義という古代ローマの伝統が表面を覆っていたが、その内部には常にゲルマンの精神が潜在しており、この2つの要素が衝突することで、近代個人主義が生まれたのである。ヨーロッパ近代の発展とは、この衝突によって生じたエネルギーの結晶なのである。

3. 近代建築-CIAMがもつ2面性-

近代建築とは、中産階級のための普遍的な建築のことである。近代建築を考えるにあたり、まずその消費者となった中産階級について考える。近代における最も大きな所産は中産階級であり、彼らが近代を支えた立役者であった。この階級は、ルネサンスの自我の肯定を絶対とする精神を支えにして、ヨーロッパ社会で市民権を得た階級である。では、ヨーロッパ人の自我とはいかなるものなのか。この問題を解明しながら、中産階級の実像を描いていくことにする。「ヨーロッパ人の自我は強靱である。自我の中には強烈なエゴイズムがあって、常に他者支配への欲望を有している。自我の解放となれば、仮借ない自己拡張欲を膨張させることで激烈な対立を起こす。だが、一方では自我の中のエゴイズムを滅却させて、精神的な安定を念願することで、自我の止揚と救済を求めている。」¹⁶⁾そのために彼らは何らかの全体的なものに帰属する。すなわち、中産階級の中には自我の肯定を絶対とする精神を支えとしておきながら、一方では自我の徹底した否定の精神というものを求めていたのである。端的に言えば、中産階級とは古代ローマの伝統を崇拜しておきながら、その裏ではゲルマンの精神を隠し持っていたのである。中産階級は、ヨーロッパ近代の構造そのものを個人の中に有していたとも言える。逆に考えれば、そのような階級であったからこそ、市民革命まで起こして、ヨーロッパ社会の主役の座を勝ち得たのである。

中産階級における古代ローマの伝統の崇拜を具象化した例として、ウィーンのリングシュトラセの街並みを挙げる。「ここは、ウィーンの中産階級のために建設された居住地で、19世紀中頃には近代市民にとって格好な社交場となっていた。主に高級アパートメントが建てられて、中

産階級はそこに豪華なサロンを設けた。彼らにとって、リングシュトラセという所は社交場の他に、己の権威や名誉を歩く人々に見せつけるといった自己表現の場であったのである。」¹⁷⁾

では、近代建築において、なぜ普遍的なものが求められたのか。この考えの背景には産業革命以来、発達し続けた機械工業がある。工業製品は大量生産化されて、建築物はその工業製品の組み合わせによって建てられていった。今までの建築の主流であった工芸的要素は、排除されていった。つまりは、建築物もその形態の芸術性を除けば、1つの工業製品となったのである。したがって、この工業製品を大量生産するには、特殊なものは無用の長物であり、普遍的なものこそ有用だった。これは、近代の枠組みの中において必然的なもので、近代建築においても例外ではなかったのである。

これまで、近代建築が持つ性質について述べてきた。これからは、その近代建築の質を極限にまで高めたC I A Mという団体について論じる。まずは、C I A Mが成立した頃、厳密に言うと第1次世界大戦直前の1914年からC I A Mが発足した1928年までの間の時代について考え、C I A Mを発足させる原動力となったものは何か探してみる。

1914年以前のヨーロッパでは、古代ローマの伝統による帝国主義が全面に露出して、その裏にゲルマンの精神が帝国主義戦争の抑止として働いていた。だが、ヨーロッパの世界化が進むに連れて、列強各国の国家主義が強くなるという矛盾が近代社会の発展と共に大きくなっていった。1914年とは、このヨーロッパの構造に限界が訪れた年であったと言える。そして、第1次世界大戦によってヨーロッパは焦土と化し、列強各国は衰退の一途を辿った。この情勢の中、ベルサイユ体制が組まれてヨーロッパ内に一応の安定感が生まれた。1920年代とはこのような時代で、「イギリスの歴史家G・バラクロウは「幻想の時代」としてとらえた。」¹⁸⁾この脆い安定が人々にヨーロッパの復活という錯覚や幻想を持たせたからだ。「この一時的な楽観的気分させたのは、ドイツとの緊張緩和が果たせたからで、この気分を反映して、不戦条約が締結されたり、軍縮会議が開催されたりした。」¹⁹⁾この動きがヨーロッパにやっと正常な状態に戻ったということを一一般感情にまでさせた。しかし、すでに国際政治の基本構造は、米ソ両超大国を極とする双極構

造に変化していた。このヨーロッパ人の現実に対する認識のずれは、ベルサイユ体制を現状維持体制にさせた。この混沌とした世界はルネサンス期と同様であり、新しい世界、新しい精神を予見させるものだが、ただ、この時代のヨーロッパは未だに古代ローマの伝統である帝国主義を引きずっていた。その結果、現状に対する洞察力が欠けてしまい、新しい世界を見つけ出すことはできなかった。

C I A Mが掲げた国際様式とは、この幻想の時代を背景にして考えられた様式であったと言える。ヨーロッパの近代建築を世界に普及させることこそ、建築におけるヨーロッパの世界化を企てることである。この時代の建築家達も、未だに古代ローマの伝統に固執していたのだ。したがって、この団体は非常に政治色の強い集団であった。実際に、C I A Mにおいて指導的立場だったバウハウスは、社会変革を促す危険因子としてナチスに弾圧されて廃校となったという例もある。

ただ、C I A Mは建築にルネサンスを求めたことも事実である。装飾を排除して、形態を人間の生身の姿のような美しさにしようとした。その模範として、大量生産された工業製品を挙げて、これらの形態を賛美した。近代建築の巨匠ル・コルビュジェは、『今日の装飾芸術』²⁰⁾を著し、その中で全般にわたって工業製品の機能性とその形態を賛美しているくらいである。また、彼の著書『建築をめざして』²¹⁾においては、「住宅は住むための機械である」とまでさえ宣言している。これを具体化したプランがドミノ・プランであって、国際様式における基本的プランとなった。

ここで注目を要するのは、C I A Mが工業製品に建築の模範を求めたことである。確かに国際様式の普及によって、建築物は大量に生産された。建築物自体が、個々の工業製品を部品としてそれらを集積した造形物となったからである。したがって、工業製品に直接の模範を求めたことも理解できる。だが、この論理は非常に安易であることを払拭できないので、少し観点を移動させてみる必要がある。

そこで、この時代の哲学を探ることで、建築の過剰なまでの工業賛美がどこからきたかを考えることにする。19世紀後半から、ヨーロッパでは「実証主義の思想が充満していた。これは、フランスの哲学者オーギュスト・コントが体系化した思想で、人間の知識は神学的段階から形而上学的段階へ、そして形而上学的段階から実証科学的

段階へと、段階的に進化する」²²⁾という論理である。人間の知識の進化論とも言える。そして、この思想が、科学の進歩や技術革新というものは、人間の進歩において最重要であるという信念を固めさせた。この実証主義は、工業の発展における思想的土台となったのである。したがって、建築における工業や科学の賛美は、実証主義の思想からの影響を強く受けている表れで、建築の発展を工業や科学の発達に依存したのである。また、CIAMという団体にさらに着目する。建築家達は古代ローマの伝統を引き継ぎ、その伝統を実行するために政治色の強い集団を結成した。彼らの国際様式の普及とそれに基づく都市計画は、明確な社会変革を起こすことを意味していた。彼らの目指した建築はルネサンスの精神から生まれたものだが、その建築を普及させるための手段が宗教改革に近いものであった。なぜなら、ルネサンスの芸術家は個人で運動を起こしたのに対して、彼らは集団で運動を起こしたからだ。この集団の性質は、プロテスタント各派の集団と同様であったと言える。

ヨーロッパ近代とは、古代ローマの伝統が表面を覆って、内部にゲルマンの精神が潜在する構造であったと述べてきたが、CIAMにおいては、表に古代ローマの伝統が出てくるはずなのに、結果としては発足当初になかったはずのゲルマンの精神が出てしまった。この矛盾は大きく、これがCIAMの崩壊の最大の要因だったのである。つまりは、1920年代の混沌とした世界をCIAMはそのまま継承してしまい、第2次世界大戦後の新しい世界や新しい精神に付いていけなくなったのである。それと建築自身においても、第2次世界大戦後の民族主義の勃興によって地域性が評価されて、国際様式は強い批判を受けてしまい衰退していった。このように、CIAMという団体自体の欠陥が、ヨーロッパ列強諸国における帝国主義の崩壊によって生まれた新しい世界に順応できなくしてしまい、時代に取り残されていった。1950年代から、世界各地で勃興した民族主義に対応する新たな建築を提案できなかったのもそのためである。CIAMの崩壊とは、このような要因がかさなって起きた、必然的な現象であったといえるのである。

-参考文献-

1. 増田 四郎『ヨーロッパとは何か』(東京:

岩波書店、1967年) p. 9.

2. クシトフ・ポミアン 松村 剛 訳『ヨーロッパとは何か 分裂と統合の1500年』(東京:平凡社、1993年) pp. 38-43.
3. 増田 四郎『ヨーロッパとは何か』(東京:岩波書店、1967年) pp. 56-57.
4. 安部 謹也『ヨーロッパを読む』(東京:石風社、1995年) pp. 36-46.
5. 安部 謹也『ヨーロッパを読む』(東京:石風社、1995年) pp. 96-101.
6. 兼岩 正夫『封建制社会』(東京:講談社、1973年) pp. 92-94.
7. 饗庭 孝男、陣内 秀信、山口 昌男『ヴェネツィア 栄光の都市国家』(東京:東京書籍、1993年) pp. 77-85.
8. 会田 雄次『ルネサンス』(東京:講談社、1973年) pp. 11-13.
9. イリス・オリゴ 篠田 綾子 訳『プラートの商人 イタリアの日常生活』(東京:白水社、1997年) p. 94.
10. メアリ・マッカーシー 幸田 礼雅 訳『フィレンツェの石』(東京:新評論、1996年) pp. 325-336.
11. 羽仁 五郎『都市の論理 歴史的條件、現代の闘争』(東京:大和出版、1968年) pp. 236-244.
12. 前川 貞次郎『絶対王政の時代』(東京:講談社、1973年) p. 66.
13. 中山 治一『帝国主義の展開』(東京:講談社、1973年) pp. 59-60.
14. 会津 晃『20世紀の世界』(東京:講談社、1974年) pp. 59-61.
15. 山本 雅男『ヨーロッパ近代の終焉』(東京:講談社、1992年) pp. 42-52.
16. 西尾 幹二『ヨーロッパの個人主義』(東京:講談社、1969年) pp. 124-126.
17. 山之内 克子『ウィーン』(東京:講談社、1995年) pp. 64-74.
18. 中山 治一『帝国主義の展開』(東京:講談社、1973年) p. 191.
19. 会津 晃『20世紀の世界』(東京:講談社、1974年) pp. 59-61.
20. ル・コルビュジェ 前川 国男 訳『今日の装飾芸術』(東京:鹿島出版会、1966年)
21. ル・コルビュジェ 吉阪 隆正 訳『建築をめざして』(東京:鹿島出版会、1967

92 (92)

年)

22. 中山 治一 『帝国主義の展開』 (東京: 講談社、1973年) pp. 84-85.

(1999年7月15日受理)